

デイオニユソス
の深層
正道

—二人の母篇—

目次

ディオニュソスの深層

目次	3
----	---

第1章 懐古的深層

(1) 大樹の根	5
(2) 執筆直後の「あとがき」	9
(3) 東京裁判史観からの脱却	12
(4) イエスのディオニュソス	16

第2章 中核的深層

(1) 原典紹介	22
(2) 「ディオニュソス」以前のオルフェウス	25
(3) 「ディオニュソス」以後のオルフェウス	27

第3章 周辺の深層

(1) 地獄の王子	33
(2) 私の中の「第二位」	35
(3) 筑波山の「性的オルギア」	38
(4) 粘膜と割礼	40

ディオニュソスの深層

目次

第1章 懐古的深層

- (1) 大樹の根
- (2) 執筆直後の「あとがき」
- (3) 東京裁判史観からの脱却
- (4) イエスのディオニュソス

第2章 中核的深層

- (1) 原典紹介
- (2) 「ディオニュソス」以前のオルフェウス
- (3) 「ディオニュソス」以後のオルフェウス

第3章 周辺の深層

- (1) 地獄の王子
- (2) 私の中の「第二位」
- (3) 筑波山の「性的オルギア」
- (4) 粘膜と割礼

第1章 懷古的深層

（1）大樹の根

二十年の空白

この『ディオニュソスの深層』を手にとって下さっている以上、すでに本編である『ディオニュソス・二人の母』は読んでいただいたものと思う。

実は私自身もまた、約二十年ぶりに『ディオニュソス・二人の母』に目を通した。その通読は、配信日の二か月ほど前のことである。

いくら自分の作品とはいえ、それに二十年も接していなかったのだから、私も「書き手」というよりは、むしろ読者の一人のようなものである。

実際、ストーリーの半ばは、完全に忘却していたぐらいだ。本当に「この作品は、こういう流れの話だったのか」と驚くことさえ度々あった。

二十年もの空白——どうしてそんな間隙を作ってしまったかと言えば、それは率直に言って、私がディオニュソスという神を怖れ、これを忌避していたからである。

いや、むろん分かってはいるのだ。この神が私にとって、切っても切れない縁で結ばれた、ことのほか重要な存在であるということは。

なにしろ第五福音書の主役は彼だと言っていいほどだし、そもそもこの神の導きがなければ「ヘルメスの杖」という神学体系を樹立することも不可能だったのだから。

そうであるとしても間違いないのは、この神が支配する領分が、私の神学の底辺部であり、むしろ地下階層部であること。そして、それが比類ないほど暗いもので、なかば狂気じみた世界でもあることだ。だからだろう。この神に関わると、すぐさま気持ちが暗くなる。それまであったツキが消えて、何か悪いことが起こりそうな予感がする。しかも、かなり高い確率でもって、実際にも、その悪いことが起こってしまう。

こういったわけで、自分にとって重要な存在であることを認識しながらも、私には「まるで逃げるようにして」この神と直接には関わらずにいた二十年があったのである。

ディオニュソス神との再会

その風向きが変わったのは、私自身のテンションが下がり、なかば鬱屈してきたのが、その主たる原因だった。すなわち、

「このような心理状況であれば、いまディオニュソス神と関わったところで、そこから落ちるツキすらないだろう。ならばいっそのこと、この神と徹底的に親密に関わってしまえ」

という開き直りが出来るようになったのである。

事実、私とディオニュソスとの関り方は、今になって親密の度を極めた。なんとなれば——『闇の神性』もそうであったが——『二人の母』を配信するにあたっては、作品の頭から終わりまでを、一度完全に書き直しているのである。そうした大がかりな文章の推敲を行ったわけだ。

そして、その推敲の間、私はずっと「ディオニュソス的な空気」を吸って過ごした。『闇の神性』『二人の母』各篇を二か月ずつとして四カ月、それほどにも長い期間にわたって、二十年も忌避しつづけた、あの暗くて狂気じみた空気を、呼吸しつづけたのである。

むろんそれは快い空気ではなかった。淀んでいた血の匂いがした。

とはいえ、そんなにも長い付き合いをしてみると、ついには「まあ、ディオニュソス神も、そんなに悪い奴じゃないな」という寛容な気持ちになることが出来た。

もっとも、こんな風に言う「何を偉そうに」と怒るディオニュソスのファンもいるかもしれない。けれども私は、この神とは、本当に長い付き合いをしているのだ。だから右の言葉については、よくよく慣れ親しんだ間柄の「くだけた表現」であるとも思っていただけとありがたい。

底辺層との接点

そうしてディオニュソス神に対し「寛容」になってみて改めて感じたこと。それは、この神と自分とのあいだに、出来るかぎりの距離を差し挟もうとした、自身の愚かさの不条理性だった。

私はもっと、この神を尊重して然るべきだった。というのも、この神を通してこそ私は「人間社会の底辺で暮らす人たち」との、強い紐帯を作ることが出来たはずだったからである。

けれど、この世界には、性欲に溺れ、酒の力にふり回され、刹那の癒しのために、自分の個性をも進んで犠牲にする人々がいる。そうした人々たちを、私は「人間社会の底辺で暮らす人たち」であると考えて。二千年前のイスラエルでは、こうした人々は「アム・ハーレッツ」と呼ばれていた。日本語では「地の民」と訳されている人々たちだ。貧しい彼らは、ユダヤ教の道徳的な戒律を守ることが出来ず、宗教的には、ほとんど見捨てられた状態にあった。

おそらく、アム・ハーレッツの側もまた、ユダヤ教に対して背を向けていたに違いない。

そうしたなかイエスは、「我らはユダヤ教の律法を守っている」と高慢になっていたパリサイ人とは対決姿勢を取り、他方、アム・ハーレッツの人々には慈愛をもって接した。そのため、イエスが引き連れて歩く群衆は、その構成員のほとんどがアム・ハーレッツという状態となった。

ある意味でイエスは、アム・ハーレッツの頭領でもあったのである。

ひるがえって、もし私が神学者、あるいは体系的哲学者として「イエスと同質のこと」をするとするならば、それは具体的にどのような形を取るだろうか。

きっとそれは、「ヘルメスの杖」のなかに、アム・ハーレッツでも容易に触れ合える箇所（接点）を確保することになるだろう。

もちろん、それは大変難しいことである。

とりわけアム・ハーレッツと上位座標との接点、あるいは縁を提供することは困難であろう。少なくとも、上位座標との「直接的な」接合を実現するような接点や縁は、まず提供不可能に近いことになるはずだ。こうした困難を前にして、私はどうしても、ディオニュソス神に助けを求めなければならなかった。

大樹のごとき神学

そもそも「ヘルメスの杖」という神学は、人々が首を反らして見上げなければならないような、まるで大樹のような宗教的体系である。つまりそれは、私たち人間にとって、あまりにも巨大な神学なのだ。とはいえ、それを大樹に譬えるならばである。それが木である以上、その根は、間違いなく地面に突き刺さっているはずである。

そして、地表に足をつけて生きている人々（＝地の民、アム・ハーレッツ）にとっては、その根や、地面からの生えぎわこそ、自分たちにとって最も親しみがある「大樹」の姿に他ならないのである。かように身近にあつて親しめるからこそ、人々はそれに触れることが出来る。

そして、こういった形であれ、彼が木に触れているならば、その触れた地点から「さらに上に向かつて大樹を登ること」は可能であろう。その可能と実現のあいだに、どれほど遠い距離があったとしても。逆に「触れてもいない大樹に登ること」は、いかなる人間にとっても、彼がどのように足掻いても不可能なことだろう。そこでは実現という概念が生じる余地すらない。

つまり大樹が「中空に浮かんで聳えているような状態」にあるならば、地表に住む人々は、その大樹に触れることも、大樹をよじ登っていくことも出来ないのである。この場合「ヘルメスの杖」という大樹は、まさしく宝の持ち腐れとなってしまう。

むろん、そうであってはならない。大樹は地面に根を下ろさなければならない。

そして、かかる大樹の根を体現する神こそがディオニュソスであり、地表に顔を出したあたりの幹（＝根元）を体現する神こそが、キュベレーをはじめとする、かの大地母神たちなのである。

それだからこそ私には、ディオニュソス神やキュベレー女神と、深く関わり合う必然性があつた。彼らに関わることによって、ヘルメスの杖という大樹に、根や根元の「実在感」を確保する必要性があつた。他ならぬアム・ハーレッツとの接点として。

となれば、二十年にわたって、この責務に背を向けようとしていた自分の愚かさ、不条理さは如何ばかりのものだっただろう。私はこれについて大いに反省しない訳にはいかなかった。

根無し草からの脱却

有名なパスカルが、右の話に通じるような言葉を残しているので、ここで紹介しておこう。

偉人でもそれらの悪徳においては普通人と変わらないということに気づかないのである。（中略）と

いうのは、人間は如何に高く聳えているにせよ、彼らは何処かで最下等の人間と結びついているからである。彼等是我々の社会から遠く離れて、中空に懸っているのではない。

偉大な人も微小な人も、同じ出来事、同じ不満、同じ情念を持っている。

由木康訳『パスカル冥想録』より

じつは私は『戯曲ディオニュソス』の第三部となる「世界の墓」を配信した時点で、またディオニュソス神から離れようと思っている。つまり「ヘルメスの杖」の上のほうの座標に重心を置いた文書を書きたいと思っているのである。

それは一つの別れではある。

けれどもその時には、すでに私の神学は「根無し草」の状態からは程とおい状態——「太い根が地下深くまで、しっかりと伸びている状態」となっていることだろう。完成した三つの『戯曲ディオニュソス』が、この状態を固守してくれているはずだからである。

それはすなわち「ヘルメスの杖」という神学が、どうしても不可欠だった課題を、着実にクリアしたということである。高く聳える樹木が「決して倒壊しないようになる」ために不可欠な課題を。

全体であるために

本節の最後に、湯浅泰雄著『ユングとキリスト教』からの一節を紹介しよう。

ルベディアンである私は、主なる神から、ある一つの座標の体现者であるよりも、むしろ全ての座標を包括する「全体」であれと命じられている。

そして、そのような「全体」であるためには、どのような心の姿勢が必要であるかを、ここに掲げる湯浅氏の文章が暗示している。もっとも湯浅氏の文章は、心理学者ユングの考えを要約したものであるのだが。

——他者が悪であるならば、自己は当然善であるはずである。したがって、われわれがそうした悪を憎み他者を非難することは道德的に正当であるという論法が成立する。こうして、意識の論理の裏面には集合的影の心理的作用が常に潜入してくるのである。

「影」のとりこ（「善の名のもとに人を傷つけること」にならないためには道德的意識の論理によって自己武装することを止めて、自己自身の中にあるくらい影の側面と共存してゆくことに堪えなくてはならない。

してみると、ディオニュソスやキュベレーは、ストイックな聖人たちにとっては、まさしく悪であり、敵であり、影であろう。彼ら聖人たちは、ディオニュソスやキュベレーの不道德性を、ほんの僅かな躊

躊躇いも見せずに非難することが出来るだろう。

そんな彼らは、彼らと同調しない私をも、不道徳だとして非難するかもしれない。

しかし、それでも私は、あえてディオニュソスやキュベレーと共存するほうの道を選ぶ。そして、その選択を決して解約しない。私はこれから先も、これら暗い神たちを「自分の影の表れ」として捉え、かつ、馴れ親しむようにしてこれを愛するだろう。

そんな私の有り様は、他人には極めて胡散臭く見えるはずだし、下手をすれば、私の立場を危うくさせるかもしれない。

けれども間違いないのは、それだけが、私が「全体」であることを望んだ、主なる神の要求に応えられる道だということなのである。

（2）執筆直後の「あとがき」

第1節で述べたように『ディオニュソス・二人の母』は、配信した時点から二十年も前に完成していた作品である。もっとも、それを推敲することで今の形にした以上、二十年前の完成は「当時における一応の完成」としておかなければなるまい。

そして二十年前の私は、この作品にきちんと「あとがき」を付していた。そして当然のように、二十年後の私は、この「あとがき」の内容も忘れていた。

だから、今になってこれを読んで「ふーん、なるほどねえ」と感心することしきりだったのである。たしかにこの「あとがき」は、これを無視するには勿体ない「分量と内容」を持っていると言えそうだ。

そこで、古いアルバムを公開するような気恥ずかしさを感じつつも、ここで、まったく文章を書き改めないで、二十年前の「あとがき」をお見せすることにした。

あとがき

第一巻「闇の神性」に続いて、ここに『ディオニュソス』第二巻「二人の母」を脱稿できたことを心から嬉しく思います。

ただし、この第二巻は「闇の神性」を引き継ぐものでありながら、反面において「闇の神性」と著しい対照を見せているものでもあります。

その最たるものは「闇の神性」が、小さなエピソードを積み上げていく構造であるのに対して、この「二人の母」は、大きなエピソードを分割することで章立てをしていく、という構造になっていることです。実際、この「二人の母」には、プロローグ的な第一章を除けば、たった二つのエピソードしか存在しま

せん。すなわち「ペンテウス物語」と「冥府行き」のエピソードです。これは「闇の神性」が、だいたい八つのエピソードを持っているのと実に対照的です。

それだけに本書に第一巻ほどの密度を求めるのは土台無理な話で、むしろ本書においては、素材（伝承された神話）がゆったりと変容、展開されていく「抜け」の良さみたいなものが出ていればいいと思います。

もちろんその「抜けのよさ」の有無は読者が決めることですが、しかし作者もある種の「抜け」はたしかに感じていて、「どうせ抜けているなら」と、その穴に、ほんらい素材には何の関係もない要素を捻じ込む、という試みをしています。

そして、その要素は主に三つあって、並べると「史観問題」「キリスト教との習合」「オルフェウス神話」ということになります。次に、この三つの要素を少しだけ詳しく見ていくことにしましょう。

史観問題

まず史観問題ですが、これについては、ディオニュソスの存在を消し去るために、アガウエが歴史を操作したことを思い出してください。

そこでは実際にはなかったはずの「セメレーが下賤の男と通じた」ことが史的事実とされています。いわゆるアガウエ・カドモス史観です。しかも、その捏造された歴史を、国民全体が疑いもせず信じている。そういう恐ろしいことが起きています。

これはフィクションですが、歴史が操作されやすいものであることは事実です。そして私たちにとっても、それは他人事ではありません。というのも、左翼的傾向が強い日教組によって歴史を学ばされた私たちには、東京裁判史観とよばれる、歪んだ歴史解釈が与えられているからです。

それは、日本という国の近代史を、ただただ悪者扱いするような歴史解釈と言えるでしょう。

詳しい内容には立ち入りませんが、その内容の水準は、本当にアガウエの捏造とさほど変わらないぐらい低俗なレベルのような気がします。しかも私たちは、何かのきっかけがない限り、その低俗な歴史解釈を事実と信じて疑わないのです。

そのような「歴史に騙されることがある」という警鐘の意味をこめて、私は「二人の母」の中に史観問題を挿入しました。

もし近代史に興味のある人は、どうか書店で右翼的な歴史書を探して読んでみてください。中立的ではなく、右翼的な歴史書をです。なぜなら、現代日本のメディアや世論が著しく左傾化しているので、本当に中立的な意見を述べている人たちは、どうしても右に傾いて見えるからです。

個人的には、私の蒙を啓いてくれたのは、渡部昇一さんの本であったことを告白しておきます。

キリスト教との習合

次に「キリスト教との習合」ですが、まず習合という言葉について説明しておきましょう。かかる習合とは「異なる宗教の神や教義が、同一視されたり混同される現象」を言います（『キリスト教のミス터리99』より）。

ディオニュソスの死と復活（ザグレウスの死とディオニュソスとしての再生）が、イエスの死と復活（十字架上の死と三日後の甦り）に習合していることは、いわば定説ですが、それ以外に、ブドウ酒の神としての性質も、イエスはディオニュソスから引き継いでいるような気がしてなりません。

何しろイエスの血はブドウ酒とイコールであり、その延長上で、イエスの血（ブドウ酒）を飲むことがクリスチャンにとって重要な儀式（聖餐式）になっています。そのため、

「キリスト教の伝播によって、聖餐式にブドウ酒が必要とされるところから、ライン川・セーヌ川沿いはブドウの大生産地となった」生野善應『教科書宗教学』より

ほどであり、それだけブドウ酒を広めたならば、私などは、その人をブドウ酒の神と呼んでも差し支えないのではないかと思ってしまうのです。

いずれにせよ、それほどにもイエスはディオニュソスに近しい存在であり、ディオニュソスはキリスト教に吸収、習合されてしまっています。そこで、本書においては、それを逆手にとって、イエスのほうをディオニュソスに習合させてみたのです。

ペンテウスを裁く場面でのディオニュソスにその試みが顕著ですが、シレノスに至っては、そのまま聖書の言葉を語っています。彼がペンテウスに語る「預言者は故郷では歓迎されない」という台詞がそうです。

ただし、ペンテウスへの憎しみを絶やさないために、あえてペンテウスの傲慢を煽ったディオニュソスの姿と、民衆の傲慢を削ぐことなく——彼らの訴えによる——十字架刑を受容したイエスの姿を完全に重ねてしまうと問題があります。そうするとイエスがひどく底意地の悪い人物になってしまうからです。私はイエスがディオニュソスのように対立者を悪者に仕立て上げたとは思っていませんし、イエス自身、「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです」

と民衆を許しているのです。イエスはディオニュソスと異なり、完全なる愛の人でした。

オルフェウス神話

三番目に「オルフェウス神話」ですが、冥府行きが、ディオニュソスとオルフェウスの二人三脚になっていることに面食らわれた方もいると思います。

たぶんギリシア神話に詳しい方ほどでしょう。二人の冥府行きは、あくまでも別々のエピソードだからです。

しかし、考えてみれば、ディオニュソスもオルフェウスも、その目的としているところは同じようなものです。

ディオニュソスは母を、オルフェウスは妻を、死者の国から連れ出そうとしている。だったら、いつそのこと似たり寄ったりの話をくっつけてしまえ、という荒っぽい考えが私の中にありました。

とはいえ、オルフェウス教の主神はディオニュソスであり、二人の因縁には浅からぬものがあります。なにしろ——手前味噌ですが——『ディオニュソス』第三巻「世界の墓」においては、オルフェウスが、アポロンとディオニュソスの媒介となって大活躍することになるのですから。

そして、実をいえば、本書におけるオルフェウスの登場は、まさに、この第三巻のための伏線であったのです。

なお第三巻「世界の墓」は、物語的な「二人の母」に対して著しく象徴的であり、また難解なものになると思います。けれども、その「世界の墓」が、ディオニュソス・シリーズの中核を形成することは間違いないと思います。ぜひお読みになってください。

二人の母とは

以上が本書に捻じ込んだ、本来ならば物語に直接関係のない要素ではありますが、最後に「二人の母」というサブ・タイトルについて触れておきましょう。

二人いる母のうちの一人は、もちろんディオニュソスの母セメレーです。

そして、もう一人の母親は、物語の前半ではアガウエ（ペンテウスの母）を指し、物語の後半では、ペルセフォネー（ザグレウスの生母）を指しています。

この二人がディオニュソスの中でセメレーと対比されるのが「二人の母」の基本設定です。図式的に表わすと「セメレー・アガウエ」「セメレー・ペルセフォネー」という感じになります。

そうなると厳密に言えば「二人の母」よりも「二対の母」のほうがサブ・タイトルとして相応しかったかもしれません。しかし「二対の母」では、あまりに言葉のうちに詩情がないように思えて、それを採用することが出来なかったのです。

（3）東京裁判史観からの脱却

マッカーサー・チャーター（マッカーサー条例）

本節と次節は「執筆直後のあとがき」の補足である。この第3節では「東京裁判史観」についての補足を簡単に行いたい。そもそも「東京裁判とは、どういった裁判だったのか」について、その概要を述べようと思うのである。

一言で言えば、それは「裁判の名に値しない創作劇」ということになるが、それを如実に示す、次の文章をはじめに読んでいただきたい。

このような、国際法にもない罪名をもって起訴したり、戦勝国の裁判官だけで国際裁判所を構成したり、事後法まで犯して日本の過去の戦争を裁いたり、勝手に侵略戦争の定義を下したり、その犯罪を個人にまで及ぼしたりといった、この一連の不法行為は、いったいどのような名目によって行われたのかというと、それはマッカーサーがつくった「極東国際軍事裁判所条例（チャーター）」によるものである。「当時における」現行の国際法や慣習法や条約などでは、日本とドイツの指導者を裁くことは出来ない。そこで連合国である米、英、仏、ソの四か国は、一九四五年八月、ロンドンに集まって戦争犯罪会議を開き、戦犯の意義を拡張することを決めた。これがすなわちニュルンベルグ裁判のチャーターである。

さらに米、英、ソの三国外相は、同年の十二月モスクワにおいて会議を開き、連合国軍の日本占領統治は、最高司令官マッカーサー元帥によって統一実行されることを協定した。そこで、マッカーサーは、前述のニュルンベルグ裁判のチャーターにならって、東京裁判のチャーターをつくったのである。

このチャーターは、戦犯とは何であるかを定義し、平和に対する罪、人道に対する罪を勝手に定めて、これによって裁判をせよと命じ、同時に裁判官の権限さえも規定したのである。それが国際法とどんな関係に立つか、実定法や慣習法と、どんな関係があるか、将来の国際社会に及ぼす影響は何であるか、そうしたことは一切おかまいなしに、至上命令として発せられたのである。

もとより、このチャーターの内容が、国際法に照らして、違法であるか否かの審判権は裁判所にあつたはずである。ところが、インド代表のパール判事を除くほかは、検事団と同様に、このチャーターを至上命令として受け取り、なんらの検討も加えなかったのである。

法律に準拠しないで、予定された意図を遂行するために、裁判を行うのであれば、初めから裁判所など設置しないで、いきなり被告たちを処刑したほうが、簡明直截である。それをわざわざ手数をかけて、ものものしく国際軍事裁判と銘うって、「平和に対する罪」「人道に対する罪」などと、もっともらしい罪名のもとに裁判したことは、自己の復讐意志を公正らしく見せるための欺瞞行為といわざるを得ない。

田中正明『パール判事の日本無罪論』より

アメリカのジェノサイド（大量虐殺）

ここからは私が語ろう。

東京裁判という司法の歪みは、結局アメリカ人が、無理くり自国の「正義」を押し通したために生じたものだったと思う。

太平洋戦争の勝者である、正義の国アメリカ——彼らは自国をそのようなものだと思っていたし、むしろそのようなのだと信じたがっていた。

しかし、ごく普通に見ても、アメリカの戦いぶりは卑怯なものだった。なんと東京大空襲では、彼らは「どうやったたら民間人を、より効率的に大量殺害できるか」について、模型を作ってシミュレーションしているのだ。軍事施設や軍人をではなく、民間人をである。

海上においても、アメリカは、もっぱら日本の運搬船に狙いを定めている。つまり軍船ではなく、軍事物資運搬船を砲撃したのである。それによってアメリカは、自分たちも傷を受けるかもしれない「軍艦 対 軍艦」の図式を作らないようにした。

そうした卑怯の極めつけが、あの二発の原子爆弾だ。一瞬にして幾十万の民間人を殺戮した、空前のジェノサイドである。

この原爆攻撃によって戦争が早期に終わったのだとアメリカは抗弁する。しかし、その論拠はかなり薄いものでしかない。原爆投下以前に、すでに日本は終戦の準備に入っており、その情報をアメリカ側も掴んでいたからだ。

とどのつまり、無邪気なまでにアメリカは「実戦で原子爆弾を使ってみたかった」だけなのである。のみならず、強敵ドイツ（西欧人の国）に原爆を落とそうとしなかった事から推測されるのは、ここに根深い人種差別の感情が横たわっていることであろう。

「正義たるべし」という強迫観念

このようにして勝った日米戦争に、アメリカが「正義の側が悪に勝って手に入れた勝利」という確固たる自負を持てなかったとしても、一向に不思議はない。むしろ、どう見ても勝利者アメリカのやり口は、後ろぐらいものだった。

しかし表向きは、アメリカは正義の権化でなければならなかった。それはヒロイズムの国アメリカにとって、一種の強迫観念だった。

では、そんな「正義たる自信はないけれども、正義という榮譽は不可欠」と考えているアメリカが、自己の優位を堅持するためには、どうしたらいいだろう。

それには敵国日本を、自分たちアメリカよりも「凶悪で汚れた民族」に貶めてしまうのが一番よい。つまり、事実の追求をするのではなく、そのような虚構を事実化してしまうことである。

そして、そのような「虚構の事実化」の舞台となった場所こそが、東京裁判だったのである。だから東京裁判は、べつに司法の表れでも国際法の表れでもなかったのだ。それは単に、アメリカの司法的創作のキャンバスだったのである。

そのように考えて、はじめて南京大虐殺のような戦争犯罪の存在意味が分かる。三十万人の民間人を殺戮したという南京大虐殺。しかし「そのような殺戮行為は、どう考えても実行不可能である」というのが、現代における精密な研究結果である。

しかし、そのような不可能ことを捏造してでも「日本の凶悪」「アメリカの正義」の図式を確立しようとしたのが、あの東京裁判だった。

そして、正義という強迫観念に囚われたアメリカに対しては、日本側の客観的な抗弁など、いくら並

べても意味をなさなかった。アメリカのジェノサイドより残酷で、ドイツのホロコーストなみの狂気を感じさせる日本の戦争犯罪、それが東京裁判の場には、絶対に必要だったからである。

創作された歴史からの脱却

もしも事実を客観的に見てしまったら、当時のアメリカ人は、自分たちの醜さに耐えられず、国ごとノイローゼにでもなってしまうていただろう。虚偽の歴史を捏造したことは、ある意味、彼らにとって「仕方がないこと」だった。

そのようなアメリカをして、私たち日本人が「可哀そう」だと思うのは構わない。アメリカがしたことを許すのも立派なことだ。

しかしながら、私たち自身が、ありもしない南京大虐殺を信じたり、不必要なまでに自国を貶めることはしてはならない。

そんなことをすれば、自嘲の念が精神を病ませ「どうせ俺たちの本性は極悪なんだから」「悪い奴は悪いことしか出来ないんだから」というマイナスの気持ちを誘発するからだ。

実際、そのような自己否定が、日本の戦後や現代に暗い影を落としている。ここでもう一度『パール判事の日本無罪論』から文章を引用しよう。

——敗戦によって、日本に民主主義がもたらされたといわれる。

人間性の解放とか、民主主義の発達とか、そのことばは美しいが、どう考えてみても、敗戦後日本人のモラルが急速に低下したのは事実であり、そこから派生する戦後の日本の社会現象が、手に負えないものとなっていることも事実である。

今日見るような狂った世相、たとえば年々おびただしく数を増加させている青少年の犯罪と、その質の悪化、法秩序を無視した集団的暴力的な治安の攪乱、旺盛な賭博心理、野獣性むき出しの享楽主義、責任のない自己主張、自由と放縦のはき違いから生ずる人生観の歪み等々、このような源が、占領政策の教育効果の影響からきていることを、われわれは否むわけにはゆかない——

私たちは、このような状態から脱却しなければならないだろう。それこそ、テーバイの国史を覆したディオニュソスの気概にならって。

（4）イエスのディオニュソス

続・あとかきの補足

本章もまた「執筆直後のあとかき」の補足である。

ではここで何を補足したいかというと、次に掲げる文章がそれにあたる。

——それほどにもイエスはディオニュソスに近い存在であり、ディオニュソスはキリスト教に吸収、習合されてしまっています。そこで、本書においては、それを逆手にとって、イエスのほうをディオニュソスに習合させてみたのです。

ペンテウスを裁く場面でのディオニュソスにその試みが顕著ですが、シレノスに至っては、そのまま聖書の言葉を語っています。彼がペンテウスに語る「預言者は故郷では歓迎されない」という台詞がそうです――

本節では、右の文章に出てくる「ペンテウスを裁く場面でのディオニュソス」と「預言者は故郷では歓迎されない」という台詞の出典を明らかにしておきたいと思う。

惨めな登場シーン

まずは「ペンテウスを裁く場面でのディオニュソス」について確認しておこう。それは具体的には、次の場面のことを指している。

莊重に大広間の扉が開き、曙光を背にしてディオニュソスが登場。手に縄をかけられ、捕縛使に連行されている形である。その背後にはシレノスならびにマイナスたちがおり、その全員が手に縄をかけられている。

マイナスたち（歌う）見よ、我らが神は、

ほんの僅かな抵抗をすることもなく、

その柔らかに繊細な手に、

醜くさくれ立った、

灰色の麻縄をかけられました。

この下界で最も崇高なる御方は、

この下界で最も惨めな姿でもって、
この場に立ち現れることを望んだのです――

これは明らかに、二十年前の私が「十字架にかけられる直前のイエス」を念頭に置きながら書いたものだ。

当時イエスは、ローマ兵によって鞭られ、虐げられ、まさに「この下界で最も惨めな姿でもって」十字架までの道程を歩んでいたのだった。私たちは新約聖書の記述によって、そんなイエスの姿を知っている。

ところが実は、私たち以上にはっきりと「十字架にかけられる直前のイエス」を、その心眼によって眺めていた人物がいた。それがバビロン捕囚（紀元前五八七―五三八）のころに活躍した預言者、第二イザヤである。

第二イザヤと「苦難の僕」

聖書学の高度批判においては、イザヤという名の預言者は三人いたことになっている。そのため「第二イザヤ」などという奇妙な名前で彼を呼ばなければならないのだが、この優れた預言者は、未来に現れるイエス・キリストの姿を幻視し、それを詩として遺した。それが「苦難の僕」の詩である。これをご覧いただこう。

見るべき面影はなく

輝かしい風格も、好ましい容姿もない。

彼は軽蔑され、人々に見捨てられ

多くの痛みを負い、病を知っている。

彼はわたしたちに顔を隠し

わたしたちは彼を軽蔑し、無視していた。

彼が担ったのはわたしたちの病

彼が負ったのはわたしたちの痛みであつたのに。

（中略）彼は口を開かなかった。

屠り場に引かれる小羊のように

毛を刈る者の前に物を言わない羊のように

彼は口を開かなかった。

捕らえられ、裁きを受けて、彼は命を取られた。

彼の時代の誰が思い巡らしたであろうか

イザヤ書53章より

第二イザヤから直接聞けないので、それが真実に正しいことかは分からない。けれども後世の私たちは、どうしても、この詩の主人公たる「苦難の僕」を、イエス・キリストと重ね合わせて見てしまう。あまりにも、両者がその身に受けた「苦難」の質がそっくりだからだ。

実はイエス自身もそうで、彼は「イザヤ書」を人前で読みながら「私の出現により、この予言は成就した」というような事を公言したことがある。

ただし、それに対する人々の反応は「イエスを殺さんばかりに追いかける」という極めて物騒なものだった。「預言書の内容に自分をなぞらえるなど、許しがたい聖書への冒涇だ」と激高されたのである。いずれにせよ「苦難の僕」の詩における、

彼は口を開かなかった。

屠り場に引かれる小羊のように

毛を刈る者の前に物を言わない羊のように

彼は口を開かなかった。

捕らえられ、裁きを受けて――

という記述は、イエスのみならず、ペンテウスの前に引き出されたディオニュソスの原像にもなっているのである。

歓迎されない預言者

次に「預言者は故郷では歓迎されない」について見てみよう。これは『ルカによる福音書』の第四章にある文言、すなわち、

はつきり言っておく。預言者は、自分の故郷では歓迎されないものだ。

というイエスの言葉から採っている。

ここでは少しだけ、かかるイエスの言葉について説明しておこう。

まず預言者とは「神の言葉を預かる者」のことであり、となれば当然、神に近しい聖人を指す言葉でもある。

そうした預言者が、あるとき異国から故郷へと帰ってきたとしよう。

単純に考えれば、すぐにこの預言者の最大の理解者となりそうなのが、昔から彼の身近にいた郷里の人々である。

何と言っても、共通の文化と記憶を持っている彼ら郷里の人々は、他の地域の人々よりは、はるかに預言者のことを知悉しているはずだ。

それゆえ私たちは「きっと彼らは、すんなりと、よく見知っている預言者の理解者となるだろう」と

いうふう想像してしまう。

身近であることのマイナス化

ところが実際には、まずそういう事にはならない。

というのも、なまじ「昔からの身近な姿」を知っていると、その卑近なイメージが、一種の精神的障壁となってしまうからだ。そして、その障壁が、壁の向こう側にある「預言者としての、深遠なる神性」を見えづらくしてしまう。

そもそも預言者だって人間だ。たとえ神近き身であっても、生身の人間としての暮らしを保つためには、どうしたって日々「愚にもつかない日常生活」を送らなければならない。いかな聖人であっても、そうした日常性を持たないと、物質的な人間として生きていくことが出来なくなってしまうのだ。これについて、パスカルの言葉をもう一度引用するのもいいかもしれない。

人間は如何に高く聳えているにせよ、彼らは何処かで最下等の人間と結びついている。彼等は我々の社会から遠く離れて、中空に懸っているのではない。偉大な人も微小な人も、同じ出来事、同じ不満、同じ情念を持っている。

しかしながら、そうした預言者の様子は、周りの人々にとって、あまりにも卑近で安っぽく、かつ分かりやすいものではない。

そんなにも容易に理解できたものが、突如として「容易には理解できない高尚な真理」な説きだしたらどうなるか。

当然のこととして、人々は「何だあいつ、しがない〇〇のくせして」といった批判めいた気持ちになっってしまうだろう。

その批判性は、むろんのこと「歓迎」からは余程とおい態度を作りだす。押し黙ったり、すぐに相手の言葉を遮ったり、あるいは大いに逆らったり、といった。

よって結論としては、やはり「預言者は故郷では歓迎されない」ということになってしまうのである。

オルフェウス神話のこと

さて、このあたりで「イエスのディオニュソス」の補足を終えたいと思うが、読者はあの「執筆直後のあとがき」に、合わせて三つのテーマが書かれていたことを覚えているだろう。

いちおう確認すると、まず第一が「史観問題」、二つ目が「キリスト教との習合」、そして三つ目が「オルフェウス神話」である。

一つめと二つめのテーマについては、いま第三節と第四節において補足をおこなった。残るは三つ目

の「オルフェウス神話」についての補足であるが、これについてはここではなく「第二章、中核的深層」で論を展開していきたい。

というのも、オルフェウスは『ディオニュソス・二人の母』の準主役であり、彼について書くべきことは、前の二つのテーマと較べて、格段にその重要性がアップすることが予想されるからだ。

オルフェウスはまさに、『ディオニュソス・二人の母』の中核に喰いこんでいる存在なのである。

第2章 中核的深層

（1）原典紹介

「執筆直後のあとがき」にはこう書かれてあった。

この「二人の母」には、プロローグ的な第一章を除けば、たった二つのエピソードしか存在しません。すなわち「ペンテウス物語」と「冥府行き」のエピソードです。

そういう訳で、今回の原典紹介は、さきの「闇の神性篇」と較べると、ずいぶん小規模なものになった。

第1章 神を待つ男

迫害によって故郷を喪失するディオニュソスは、他の神にはないスケールの大きな放浪の神話を、一方では持つことになる。その足跡は古代ペルシアなど中近東全域から、シリア、エジプトを経てインドのバクトリアにまで及ぶ。

楠見千鶴子『酒の神ディオニュソス』より

.....

第2章 ポリュドーロス

第3章 カドモスとアガウエ

第4章 闖入者

第5章 ペンテウス

第6章 バッコスの子女

右の章群の原典を紹介するとすれば、エウリピデスの『バツカイ（バッコスの信女）』を第一に挙げなければならぬ。しかし一篇のギリシア悲劇を、ここで丸々掲げる訳にもいくまい。文庫本で百二十ページぐらいはあるからだ。

とはいえ都合のいいことに、楠見千鶴子氏が『酒の神ディオニュソス』のなかで『バツカイ』の要約を行ってくれている。そこでここでは、楠見氏の「要約」のほうを掲げることしよう。それは次のようなものとなる。

紀元前五世紀の悲劇作家エウリピデスは、『バツカイ』で、諸国をめぐる長い放浪の末、体得した酒による秘儀を携えて生まれ故郷にやってきたディオニュソスを、時の城主ペンテウスが、このうえなくいがわしい男として排斥しようとするさまを克明に描いている。

ペンテウスの見たディオニュソスの姿は、女と見まごう軟弱な恰好に長髪を香油で匂わせ、恥知らずの色事師と変わらない言動をふりまく、素性もさだかではない異国帰りの男だ。

しかし、このときすでにテーバイでは、女たちがこぞってディオニュソスの信仰に帰依していた。家を捨て、山に籠って酒を呷り、乱行を繰り返すのが下層民ならまだしも、ともに王宮に住んだ女たち、親族、そして祖父のカドモスや予言者テイレシアスまでが、いまや山へ向かおうとしているのだ。

とはいえ、ペンテウスの親族の、ディオニュソスへの蔑視という点では誰しも似たりよったりである。ペンテウスの母アガウエは、帰依したといっても、ディオニュソスが怒りから彼女を狂わせて信女にさせてしまったのだ。というのも彼女は、妹に当たるディオニュソスの母セメレーが、人間の男との情事でディオニュソスを身籠ったのに、ゼウスが相手だと言ったために神の雷火で滅ぼされたのだと言いふらした。

一方祖父カドモスも、たとえディオニュソスの出生が少々いかがわしくても、神には勝てないから従順を装うほうが身のためだと、年長者らしい狡猾さでペンテウスを諭す。

しかし、時の最高権力者であり、逆上のあまり半ば理性を喪ったペンテウスは、断固としてディオニュソスを認めず、その思想を嘲笑し、抹殺を図る。そしてついに、身分を隠し、青年の姿で眼前に現れたディオニュソスに縄をかけ、牢に閉じ込めてしまう。

しかし、縄は自然にほどけ、ペンテウスの館は、地震と雷火によって燃え上がったのだった。それを見て異常をきたしかけたペンテウスに、ディオニュソスは言葉巧みに罠をかけた。キタイロンの山中で踊り狂っている女たちを盗み見させ、王の権威を失墜させたのだ。

彼はそこで、狂った母アガウエによって生きながら八つ裂きにされ、無残な最期を遂げるが、ディオニュソスの懲罰はこれにとどまらず、カドモス一族のテーバイからの追放という、徹底的な殲滅が行われる。自分の力を認めなかった身内への、近親憎悪ともそれ以上とも思える容赦のなさである。

楠見千鶴子『酒の神ディオニュソス』より

.....

第7章 プシュコポンボス

第8章 冥府行き

第9章 ケルベロス退治

第10章 ペルセフォネー

第11章 テュオーネー

ゼウスに愛されたばかりに何の罪もなく死なねばならなかった哀れな母セメレーが、冥府に下った後々

も、そのことはディオニュソスの心にかかっていた。

父は最高神ゼウス、母は人間で、半神であるディオニュソスは、その後オリンポス十二神の座を得るために並々ならぬ苦闘を経なければならなかったが、それを果たしたとき、冥府に下った母をなんとかしようと決意した。

彼はまず、ペロポネーソス半島北部、今日も沼地であるレルネーに行つて、そこから「底なし沼」をくぐつて冥府に下った。

冥府を守る死界の女王、ペルセポネーへの贈り物としてぎんばいかの樹を携えていた。これと引き替えに死者の母を連れ戻し、輝く太陽の光を見せてやるつもりだった。

異例の取引きではあったが、歌の力で交渉に成功したオルフェウス同様、ディオニュソスも母のセメレーを取り戻した。しかもオルフェウスが愛妻エウリュディケを地上へあと一歩のところまで喪つたのは反対に、彼は首尾よく地上へ連れ出した。

そればかりではなく、ゼウスの許可を得て、自分と一緒に母を天上へあげ、神々の合議の結果、セメレーは女神としてトロイゼンのアルテミス神殿に入るようになった。

息子の深い愛に恵まれたセメレーは、ディオニュソスの細かな配慮で、その名をテュオーネーと変えた。母がこのような好運を周囲から妬まれないように、との心づかいからだつた。

楠見千鶴子『酒の神ディオニュソス』より

ディオニュソスとセメレーの物語は、セメレーがゼウスの雷光に打たれて終わったわけではない。というのは、彼女は死んだのではないといわれているからである。

セメレーの場合も、ペルセポネーが冥界に留まっていた時期と同じように解釈しなければならない。ディオニュソスは母セメレーを再び地上に連れ戻すために出かけねばならない。

深い泉レルネーのあたりには——ここでデメテルの秘教がおこなわれていたが——、デメテルがペルセポネーのところへでかける物語と似たような物語が伝えられていた。

ディオニュソスはセメレーを探しにその地にでかけるにあたり、**冥界への導き手、道案内人**を必要とした。この奉仕の報酬として彼はまったく女性的献身を約束しなければならなかった。そうすることにより母のところへ行き、連れ戻すことができた。

彼は「いちじくの木」で男根を作り、道案内人との約束を果たすために、これを立てた。この道案内人——元来はこの（レルネーの）秘教で崇められていた男根像であるにちがいない——はプロシウムノスあるいはポリウムノス（「たいへん崇め歌われたもの」といわれた）。

さらに言い伝えによれば、ディオニュソスはセメレーを地上に連れ帰り、不死なる女神にしてテュオーネ（「熱狂する女」）という名を与えた。同じ意味のテュイアスは、すでに述べたようにリクニテスと呼び起こすパルナッソス山麓のディオニュソスの熱狂する女祭司たちにつけられたものである。

さて、この物語の結末は、女神テュオーネとディオニュソスが天に昇るところで終わる。

ケレーニイ『ギリシアの神話・神々の時代』植田兼義訳より

（２）「ディオニュソス」以前のオルフェウス

二つの神話の合体

本編における、第8章以降のストーリーは、ディオニュソスとオルフェウスによる「冥府下り」の物語となる。

オルフェウスの冥府下りは、ギリシア神話のなかでも、かなり有名なエピソードである。

一例を挙げると、誰もが運動会で聞いている、オッフェンバックの『天国と地獄』は、もともと「オルフェウスの冥府下り」を題材にしたオペラの序曲なのである。

そして原典紹介でも見た通り、ディオニュソスにもまた、冥府下りのエピソードが存在する。むしろ、オルフェウスのそれに比べたら、はるかにマイナーな挿話なのではあるけれども。

とはいえ、この二つのエピソードを、私のように一つにまとめてしまった人間は、おそらく他にはいないだろう。権威ある「古来よりの神話」を前にして、そんなことをすれば、何となく、ルール違反のようない気持ちになるからである。

しかしながら、典型的なO型人間の私にとっては、そこは大した縛りとはならなかった。事が何であれ、細かいことは気にしないのがO型人間であるからだ。

自由な発想と言えは聞こえがいいが、「合体」についての最初の着想も「似たようなエピソードなのだから、いっそ一緒にしてしまえばよい」という、まことにいい加減なものだったのである。

詩人と神の絆

つぎに考慮したのが、オルフェウス教の主催神についての違和感である。

詩人オルフェウスが開いたと伝えられる「オルフェウス教」の主催神は、アポロンとディオニュソスとされている。

しかし、その教義のなかで「オルフェウスとアポロンとの絆」を伝える話が多いのに、一方のディオニュソスとのエピソードは、全くそうではない。すなわち、これと敵対するものや、暗く不穏な雰囲気のものばかりなのだ。

「これではバランスが悪い。暗くても構わないが、何としてもオルフェウスとディオニュソスとの絆が浅すぎる」

そう思った私は、その浅い絆を「二人連れの冥府下り」によって深めてもらおうと考えた。そこで生まれたのが、ディオニュソスとオルフェウスが和解する、次の場面なのである。

ディオニュソス 怒りなどしないさ。怒っても無駄だ。ただ……うむ、ただ私たちが、共通の目的を持った、二人きりの仲間であること。そして、かの偉大なる神が「二人が協力すれば目的を達せよう」と言っていたことを思い出そう。そういう方向にしか、生産的な答えはないのだからな。

オルフェウス おお……

ディオニュソス 私の方からは、出来うるかぎり誠実に、お前に協力することを約束する。だからお前もまた、出来うるかぎり私に対して心を開いてほしい。

オルフェウス もったいないお言葉です。

第9章 「ケルベロス退治」より

ブルフィンチからの抜粋

そうはいっても、読者のなかには、オルフェウスの冥府下りについて「うっすらと知っているけれども、細かいところまでは覚えていない」という人もいるだろう。

そこで、そうした読者のために、ここでブルフィンチの『ギリシア神話』から、オルフェウスとエウリュディケーの物語を、抜粋して紹介することにする。

ちなみにトマス・ブルフィンチ（一七九六―一八六七）はアメリカの作家で『ギリシア・ローマ神話』や『中世騎士物語』などの著作がある。

おそらくビギナーが最初に読む「本格的なギリシア神話」がブルフィンチのものであろう。私もそうだった。なお私が最初に読んだのは角川文庫のものである。

——エウリュディケーは「オルフェウスと」結婚してから友人のニンペーたちと散歩を楽しんでいる時、早速、羊飼いのアリストaiosに姿を見られてしまった。

羊飼いは彼女の美しさの虜になってしまい、進んで言い寄って行ったのである。そのため、エウリュディケーはその場から逃げ出したものの、逃げる途中で叢にいた毒蛇を踏みつけ、足を咬まれて死んでしまった。

オルペウスは自分の悲しみを歌にして、神々や人間など、この世で息をするすべての者に訴えたのであるが、それが少しも効き目がないことを知ると、今度は死者たちの国へ赴き、自分の妻を捜し出そうと決心したのだった。

T・ブルフィンチ『ギリシア神話と英雄伝説』佐渡谷重信訳より

従来の冥府下り

ここで『ディオニュソス・二人の母』であれば、オルフェウスとヘルメス・トリスメギストスとの出会い。その後のディオニュソスとの冥府下り、と話が続くことになる。

しかしここでは、ヘルメス・トリスメギストスやディオニュソスが関わらない、従来の「オルフェウスの冥府下り」を、引き続きブルフィンチに語ってもらうことにしよう。

——そこで、彼はタイナロス岬の片側にある洞窟を降りて行き、ステュクスの国に到着したのである。そこで、群れをなす亡霊の中を通り抜けて、ハーデースとペルセポネーのいる玉座の前に進み出て、豎琴を奏でながら歌うかのように、こう訴えるのであった。

「〔中略〕どうか、エウリュディケーの生命の糸をもう一度結んで生き返らせて下さい。私たちの運命はみんな、あなた方の手中にあって、遅かれ早かれ、あなた方の国に参らねばなりません。

妻もまた、定められた生命をまっとうすれば、当然、あなた方の国へ参ります。でも、それまでは私にお授け下さい。お願い致します。

私の願いを聞き入れて下さらぬなら、私は一人で地上へは戻りません。私たち二人の死に歓喜の声をあげて下さい」

〔中略〕女王であるペルセポネーもオルペウスの哀願を拒むことが出来ず、そして、国王のハーデースはその願いを聞き入れることにしたのである。そこでエウリュディケーが呼び出された。

T・ブルフィンチ『ギリシア神話と英雄伝説』佐渡谷重信訳より

このようにオルフェウスは、豎琴と歌声だけで、亡き妻エウリュディケーと再会する権利を獲得することが出来たのだった。

しかし、ここにディオニュソスとペルセフォネーの「血縁」のエピソードが挿入されると、さらに自然な「権利獲得の物語」が現出するのではないだろうか。私はそう思うのである。

(3) 「ディオニュソス」以後のオルフェウス

ハデスの前から去って

本編『ディオニュソス・二人の母』にはこうある。

オルフェウス 私は妻を、生者の世界へ連れて帰りたいのです。

ハデス 図に乗りおって！ そんなことを私が許すと思うのか！ いっそお前のほうを死者の国の住人としてやろうか！

ペルセフォネー ハデスさま、どうかこの方たちを無下にあしらわないで。

ハデス むう……

オルフェウス どうかお願いします。

ハデス ああ分かった！ 冥王の沽券に関わるがゆえ、ただで死者を連れていかれる訳にはいかない。帰還には条件がある。ただし、それは追って伝えることにしよう。

その後のオルフェウスの経緯について、まずブルフィンチに語ってもらおう。

ブルフィンチのバージョン

こうして、いまオルペウスは自分の妻を連れて地上に戻ることが許されたのであるが、それには一つの条件が課せられていた。それは二人が地上に到着するまでは、オルペウスが決して振り返って妻の姿を見てはならぬ、ということであった。

まずオルペウスが先に進み、その後ろをエウリュディケーが従い、暗い急斜面の坂道を、まさに森閑とした中を登って行ったのである。

そして、いよいよ二人が出口に到着し、楽しい地上の世界に入ろうとした、まさにその瞬間に、つい、あの条件を忘れて、オルペウスは妻が後ろからついて来ているかどうかを確かめてしまったのだ。

二人は互いに腕をのばして抱き合おうとしたのだが、掴むものは空気ばかりだった！

こうして、エウリュディケーは二度目の死界への旅路へと向かうのであったが、自分の夫を怨むことはできなかった。妻の顔をひと目見たいという夫の耐えがたい気持ちを、どうして咎めることができるであろうか？

「さようなら」と彼女は言い、さらに「さようなら、これが最後の言葉よ」と続けると、サッと地下へ連れ去られてしまい、そのため、彼女の別れの言葉さえ、夫の耳にはほとんど聴きとれなかったのである。オルペウスは妻の跡を追いかけようとしたし、さらに、下界に降りて、もう一度、妻を取り戻したいと嘆願したのであったが、非情なる渡し守は、オルペウスの嘆願をはねつけて渡ることを許さなかった。

T・ブルフィンチ『ギリシア神話と英雄伝説』佐渡谷重信訳より

オウディウスのバージョン

右に見られるように、オルフェウスが暗い坂道で後ろを振り返ったのは、まったくの不注意であり、「つい」重大な条件を忘れたことによる行動だった。それは考慮するほどの原因を持たない、純粹に「迂闊で突発的な出来事」であった。

しかし、ローマ時代の詩人であるオウディウスが伝えているバージョンでは「オルフェウスが振り返るのも致し方なし」と思えるような、じつに同情的な記述の仕方がなされている。

そして私は、こちらのほうが余程、ブルフィンチよりも文学的価値が高いと思っている。そこで以下に、その該当箇所を掲げることしよう。

オルペウスは彼女を受け取ったが、それには、条件がつけられていた。アウエルヌス湖の谷あいを出るまでは、うしろを振り返ってはならないというのだ。この禁を破れば、せっかくの贈り物がふいになるのだという。

もの音ひとつしない静寂のなか、おぼろげな靄に包まれた、峻しい、暗い坂道を、ふたりはたどっていった。

もう地表に近づいているあたりだったが、妻の力が尽きはしないかと、オルペウスは心配になった。そうなると、無性に見たくなる。愛がそうさせたということになるが、とうとう、うしろを振りかえった。と、たちまち、彼女はずるずると後退した。腕をのぼして、夫につかまえてもらおう、こちらも相手をつかまえようと、懸命になるが、手ごたえのない空気がつかまらないのだ。

こうして、二度目の死に臨んでも、彼女は、夫への不平を何ひとつ口にしなかった。それもそのはずだ。こんなにも愛されていたという以外に、何の不平があるというのだろうか？

ただ、夫の耳にはもうとどかない、最後の「さようなら」をいって、もと来たところへふたたび落ちて行った。

オウディウス『変身物語』中村善也訳より

ここでのオルフェウスには、焦りがあり、エウリュディケーを見ようか見まいかという迷いがある。よって、その振り返りは、迂闊な突発的出来事とは、全くもって趣を異にしている。

しかも、彼の迷いが生じた原因は、愛妻エウリュディケーへの心配なのだ。とすれば、ここには、まことに深い、人間の愛と苦悩とが表現されていると言ってよいだろう。

二つの不安に苛まれて

しかしながら、もっと興味深いバージョンも存在する。

たぶんそれは昔漫画で読んだもので、今となっては私の記憶の中にしかないものだ。しかしながら、これをスルーしてしまうのは余りに惜しいので「一応、不完全ながら」と前置きしてから、その内容を紹介することにしよう。

してみると、そこでのオルフェウスは、エウリュディケーを背にしながら歩く暗い坂道が、どこまでもどこまでも、延々と続いていくような錯覚に囚われてしまう。いわば出口のないトンネルを歩いているような気持ちになったのだろう。

あまつさえ、そうして歩いているうちに、足元が固い岩盤から、柔らかい枯草のようなものへと変わってしまった。

すなわち、それによりオルフェウスの耳には、エウリュディケーの足音が聞こえなくなってしまったのである。それまで、この「足音」だけが、背後に妻がいることを教えてくれる、唯一の表徴だったのに。愛妻がそこにいるかどうかとも分らない不安。もはや道のりに終わりが来ないのではないかという不安。その二つの不安が、オルフェウスの精神を、どうしてもないほど疲労させ、またどうしてもないほど愚昧にした。

そう、オルフェウスは、そうすればどうなるか重々分かっていたはずなのに、にも関わらず、すぐさま後ろを振り向くにはいられなくなってしまったのである。

そうして振り向いてみれば……そこにあったのは、ハッとしてすぐ全てを諦めたような妻の顔だけだった。すべては終わった。もはやエウリュディケーは、消えるようにして冥界へと帰るしかなかった。

妻の消失を目にして呆然とするオルフェウス。救いようがないほど疲れた表情を浮かべるオルフェウス。しかし、その後さらなる驚きが彼を待っていた。というのも、彼がもう一度もとの方向に体を向けると、本当に「すぐそこに」暗い坂道からの出口が見えたのである。

つまりゴールは、存外なほどオルフェウスの間近にあったのだ。ということは、彼がもう少しだけ前に進んでいれば、このように悲しい別離は生じなかったはずなのだ――

という感じの物語である。しかし、ここから先は、私の完全オリジナルになってくるが、私は夫婦の別れの際に、エウリュディケーに、次のような言葉を語らせたいと思うのである。

エウリュディケーの最後の言葉

愛するオルフェウス、どうか振り向いてしまった自分を責めないでください。

私は僅かなりとも冥界で暮らした人間として、ハデスさまの性根の真実を知っています。それは、かの冥王が、その狭量な性格からして、すでに冥界の領民となっている私を、自領から逃したりするはずがないということです。

そもそも、この暗い坂道は、他ならぬハデスさまの想念によって作られたものです。あるいは、冥王

の意図を大きく反映した、純粋な物質で出来たものとは、大きく異なる心的な創造物です。

よってオルフェウス、この坂道には、あなたと私がともに歩く限りは、決して「終わり」が訪れることはあり得ませんでした。逆に言うところ、この道は、あなたが私を振り向いて見るときまで、どこまでも延々と続いていたはずなのです。

要するに、初めから私たち二人には、この「別離」という悲しいシナリオしか用意されていなかったのです。それが冥王ハデスさまの思召し召しだったのです。

でも、どうか聞いてくださいオルフェウス。この道行きを進むあいだ、私はずっと幸せでした。自分が、もう二度と地上に戻れないと知っていてもです。

なぜだか分かりますか？ その理由は、しばらく見ていなかったあなたの背中を、この道行きの間は、ずっと、心ゆくまで眺めることが出来たからです。

軽やかに振っている腕も、踏みしめて歩いている足も、ただそれを見ているだけで、私にとっては何より悦ばしいものでした。本当に、懐かしくて涙が出そうになりました。あなたの何気ない仕種が、こんなにも目に心地よく、こんなにも胸を温めるものだと……これまでの私では、きっと気づけなかったことです。

正直に言えば、私は、この道がどこまでも続いてゆけばいいのに、とそう心に願ったほどでした。こうして二人で歩いている間だけは、私は確実に、誰より愛するあなたと一緒にいられるのですから。

ということとは、そうです、私は、もうすでにあなたから望外の幸せを頂いているのです。それはもちろん、あなたが冥界まで来てくださったからこそ生じた「幸せ」です。このような幸せを頂けたことを、私は心から感謝しています。

ですからオルフェウス、これより後、決して自分を責めたりしないでください。これ以外のシナリオは存在しなかったこと、また私がすでに幸福であることを理解してください。そうして、どうか胸を張って、安んじて地上の世界へと還ってってください。

それに幸いなことには、私たち人間は、地上で永遠の命を得ることはありません。つまりいつかは、あなたも私同様の死者となるのです。ということは私たちは、いつか必ず、死者同士として再会することが出来るということです。

オルフェウス、そのときを楽しみにして、これからの長い日々を、おたがいに耐え忍ぶことに致しましょう。それまでの、しばしの別れです。さようなら、最愛のオルフェウス。

第3章 周边的深層

（1）地獄の王子

ノストラダムスの言葉

実をいうと、私があの『ディオニュソス・二人の母』の中で一番やりたかったことは、ディオニュソスをして、彼が「地獄の王子」であることを明確に規定することだった。

では、かかる地獄の王子とは何か。

それは、まずさしあたって『ノストラダムスの黙示録』と呼ばれる文書に出てくる何者かの名称である。

——これら戦いあう狂乱の果て、地獄の力がイエス・キリストの教会に向けて発射されるでしょう。この地獄の力こそ、第二のアンテクリストになっていくのです。

これですべては荒廃し、放棄され、異教により破壊されたサンクタ・サンクトルム（ラテン語で神の聖なる場所の意味）へと転回していくのです。新・旧約聖書は追われ、焼かれ、そのアンテクリストが地獄の王子となるのです。

五島勉『ノストラダムスの大予言V』より

一読すれば分かるように、右に掲げた文章は、きわめて断片的であり、また分かりやすい代物では到底ない。だが最低限ここに「地獄の王子」アンチキリスト」という図式が現れていることだけは、読者にも察してもらえないのではないだろうか。

福音書シリーズ的には

さて、アンチキリスト（アンテクリスト）とは、要するに「キリストのアンチテーゼ」ということである。

そして、福音書シリーズ的な語法を使えば、かかる「キリストのアンチテーゼ」を「アルベドのアンチテーゼ」と言い換えることが出来るはずだ。

そうしてみると、第三福音書では「アルベド」のアンチテーゼが「ニグレド」であること。そして、アルベドとニグレドが総合されることによって「ルベド」無からの創造」の真理が現れることが表明されている。

これを人称的に表せば「キリストとディオニュソスが合成されることによって、そこに創造神が現れる」ということになるだろう。これはまた、ニーチェが正常人としての末期に言い残した「十字架にかけられた男 対 デイオニュソス」という謎かけへの回答でもある。

そしてニーチェは、まだ若い頃、彼の天才が燦然と輝いていた時期に、「アンチキリストの名を誰が知っているだろう、私はそれをディオニュソス的なものと呼んだのである」と書いている。

こうした流れを追っていくうちに、私には、ノストラダムスの言う「アンテクリストたる地獄の王子」に相応する個人名は、他のいかなる名前よりも「ディオニュソス」が適当であると感じられるようになったのである。

秘密を明らかにする

しかも、それはギリシア神話の設定からも、その正当性を確かめることが出来ることなのである。

というのも——まずハデスには「冥府、陰府、黄泉、地獄」などの訳語が当てはめられている。したがってハデスの類縁には「地獄の」——という冠詞を使えることになる。たとえば「地獄の住人」「地獄の一族」などだ。

次に、冥王ハデスの妻は、地上から攫ってきたペルセフォネーである。したがってペルセフォネーには、それが結婚後であれば「地獄の皇后」や「地獄の女王」と呼ばれる資格があることになる。

第三に、かつてペルセフォネーには、ザグレウスという息子が存在した。そして、このザグレウスこそは、のちのディオニュソスその人（神）である。

よって、その血縁関係により、ディオニュソスは——地獄の女王の息子であるところの——地獄の王子と呼ばれる資格があることになる。

これら三点を総合すれば、ディオニュソスが「地獄の王子」であることは、もはや揺らぎもしない客観的事実となるだろう。

それにしても、ハデスという語に「領域としての名称」と「個人名としての名称」という二つの役割があること——つまり「冥府としてのハデス」と「冥王としてのハデス」の二つがあることは、書き手にとっても読み手にとっても、大きな厄介ごとであると言うほかない。本当に文章が分かりづらくなって困ってしまう。

それはともかくとして「ディオニュソス＝地獄の王子」という図式についてだが、この図式は、これまでは余り人々から注目されたことがなかった。

というのも、ほかならぬ母親（ペルセフォネー）自身が、自分がザグレウスの母親であることを、すっかり忘却してしまっていたからだ。それに伴って「地獄の王子としてのディオニュソス」もまた、ほとんど人々の関心を引き付けない血縁関係になってしまった。

言うなれば「ディオニュソス＝地獄の王子」という図式は、これまでは「すっかり忘れられた真実」だったのである。

だがそれは、忘れたままにはならない、きわめて重要な真実でもある。現代がノストラダムスが指し示す時代であるならばなおさらのことだ。

この重大な秘密（真実）を開示するために、私は「ディオニュソスの冥府降り」の物語を書いた。そうして主人公のディオニュソス自身に、母に対する抗議として「ディオニュソスⅡ地獄の王子」という図式の正統性を叫ばせたのである。

ディオニュソス おお、それが冥府の女王の権力か。ですが聞いてください。あなたが冥府の女王であるならば、私は本来、この冥府の王子と呼ばれていたはずなのです。あるいはハデスの王子、地獄の王子、と。

劇中、これに対して、母ペルセフォネーは何ら応答しなかった。だからここでは私が応えよう。ディオニュソスよ、あなたはこそは、まことに「地獄の王子」と呼ばれる資格を持っている神である、と。

カバラにおける反キリスト

最後にもう一つだけ引用を行って本節を終えることにしよう。

カバラでは、二人の「救世主」——苦しむメシア・ベン・ヨセフと勝利のメシア・ベン・ダビデ——を一体のものとしてとらえている。メシア・ベン・ヨセフはサタンが石の上で生み落とした反キリスト的性格のメシアであって、終末の日に死んで、メシア・ベン・ダビデから天上のエルサレムに新しい生命を与えられるのである。

湯浅泰雄『ユングとキリスト教』より

（2）私の中の「第二位」

ステロペーとメロペー

本編の最後のほうに、ステロペーとメロペーの名前が出てくる。

それはテュオーネーとなったセメレーが「自分と一緒に、天界に住んでもらうために招聘しようとしている人物」として挙げたものだ。もっと正確には「ヘルメス・トリスメギストスが、自身の推薦枠とし

て挙げた二人のニンフ」ということになるだろう。

覚えている方も多いと思うが、ステロペーとメロペーは、言わばディオニュソスの「育ての親」である。一応簡単に説明すると——ゼウスの太腿から摘出され、それにより二度目の誕生を迎えたディオニュソスは、すぐに子鹿の姿に変えられた。ヘラの目から逃れるためのカモフラージュとしてである。

その「子鹿としてのディオニュソス」を五年にわたって飼育したのが、他ならぬステロペーとメロペーだった。そうして五年後、ディオニュソスは人間の姿となって、二人の前を去っていくことになる。

別離の場面

今になって思い出したのが、この別離の場面には「元ネタ」があったことだった。佐々木淳子さんという方が描いた『ダークグリーン』という漫画の別離シーンである。

それは主人公ホクトが、リュオンと別れるときのことだ。リュオンはホクトにとって、我が子と親友を合わせたような存在である。

リュオンは超能力のような力を使って、ホクトの体を動けなくする。

その上でホクトに「動けないでしよう。それでいいんだ。追われると困るから」といった意味合いの言葉をかける。そうしてから決然と敵に向かって飛んでいき、ホクトとの永遠の別れを覚悟するのである。

この別れ方をモチーフにして——人物としては、リュオンとホクトを「ディオニュソスと二人のニンフたち」に——小道具としては、リュオンの超能力を「酒による睡魔」に——置き換えたのが、私の『ディオニュソス』の別離シーンであったわけだ。

となれば、かなりトレースの度合いが強くなるが、そこはどうか大目に見てほしいと思う。なにぶん私は佐々木淳子さんの大ファンなのだからである。

私の漫画ランキング

私はかなりの数の漫画を読んできた人間だが、その中で「優れた漫画作品ランキング」を作るとすれば、佐々木さんの『ダークグリーン』は、ランキングの第二位ということになる。

先に第一位の話をするが、この栄えある第一位の漫画は、山本鈴美香さんの『エースをねえ！』である。

連載開始が、私の生まれた年だというから、相当昔の作品ということになる。だが五十年の月日が流れても、その間にこの作品を超える漫画が出たとは、私には到底考えられないのである。そし手、おそらくは今後も……

かかる『エースをねえ！』の主題は、要するにアルペド侵入である。

つまり人間（自我）の限界を、超越者からの恵みを受けることによって、主体が乗り越えていくということだ。

作品中に出てくる「勝ちに不思議の勝ちあり」とか「自我が先に立つ者は頂点に登ることが出来ない」といった言葉が、その秘められた主題を、さりげなく私たちに教えてくれている。

そして、これと同じテーマを扱った小説に、ロマン・ロランの『ジャン・クリストフ』がある。主人公のモデルとなったのは、かの有名な作曲家ベートーヴェンだ。

この高名な小説の主題もまた、アルベド侵入なのである。そして、この『ジャン・クリストフ』によって、ロマン・ロランはノーベル文学賞を獲得している。

そして、小説と漫画という媒体の違いはあれども、ごく単純に比較すると、私は『ジャン・クリストフ』よりも、『エースをねらえ！』のほうが、作品としての値打ちが高いと思ってしまう。何より品格が高いし、ストーリーに無駄なところが全くないからである。

そんなノーベル賞受賞作を上回る『エースをねらえ！』を超える作品が、そう易々と出てくることはないだろう。

ちなみに、作者の山本鈴美香さんが宗教家に転身されたときには、私は「さもありなん」と思った。彼女が般若経典の奥義を知る人だったからだ。

彼女が創設された神山会という宗教団体は解散してしまったようだが、彼女の『エースをねらえ！』は、それ自身が優れた宗教書なので、それを上梓した時点で、宗教家の役目は、充分に果たしていたことになるだろう。

ダークグリーン

あえて繰り返すが『エースをねらえ！』を超える作品が、そう易々と出てくることはないだろう。

しかし『エースをねらえ！』に肉薄する作品は現存する。内容的傾向はかなり異なるが——それが佐々木淳子さんの代表作である『ダークグリーン』なのである。これも繰り返すが、この作品が私のなかの「優れた漫画ランキング第二位」である。

かかる『ダークグリーン』のテーマは、植物と動物（人間）の補完性ということになるだろう。

もっともそれは、食べ物（植物）と捕食者（動物）などという浅薄な補完性ではない。ここで示されている補完性は、もっとずっと深い次元にあるものである。

すなわち、「世界の在り方を企画する、植物の全体意識（＝ダークグリーン）」と「それを現実の世界のなかで実現する、動物の意識」という二者の補完性が、『ダークグリーン』の主題になっているのである。そして、この二つの補完者たちが出会うのが「Rドリーム」という特別な夢である。よって、この夢の世界が『ダークグリーン』の主たる舞台となる。

となれば、ごく表面的に見れば『ダークグリーン』という漫画は、Rドリームで繰り広げられる、ホクトとリュオンを主人公にした、冒険活劇ということになるだろう。

この冒険の面白さと、隠された主題の深遠さが『ダークグリーン』という漫画作品の価値を、どこまでも高いところへと押し上げている。

ストーリーのうちには若干、環境左翼への誘いのような要素も含まれているが、特別そこに注意を向

ける必要はあるまい。作品発表の当時（1980年代）は、確かに自然破壊が社会問題として、特にクローズアップされていた時代だった。

ところで私は、いつか『色彩の寓意』という作品を発表するつもりであり、すでにその草稿も存在している。そして、そのなかで「緑と赤の補完性」について論じようと考えている。

これは「葉緑素（緑）とヘモグロビン（赤）」の補完性であり、それゆえ当然「植物と動物」の補完性でもある。

ということは、当然その発想の原点には『ダークグリーン』の設定があるわけだ。私はそれぐらい『ダークグリーン』からの強い影響を受けているのである。

この優れて幻想的な作品がアニメーション化されなかったのは誠に残念な話であるが、現代の技術で制作すれば、そうとうに良いものが出来そうな気がする。昔アニメ化の企画が出されたことはあるそうなので、誰か今その実現を手掛けてもらえないだろうか。

さて、私の漫画ランキングは、右の二作品が不動で、第三位からは、その時々において入れ替わりがある。『ブラック・ジャック』『スラムダンク・バガボンド』『ピアニシモでささやいて』などが第三位の候補であるが、ここまでくると『ディオニュソス』とは何の関係もない話になってしまう。よって、こちらで本節を終えることにしよう。

（3）筑波山の「性的オルギア」

性的オルギアの記録

『ディオニュソスの深層・闇の神性篇』において、私は「キュベレーの祭」でもある、性的オルギアについて触れた。このとき私は次のように述べた。

性的オルギアは、なにも古代ギリシアに限った儀式ではない。

それは世界中のあらゆる農耕地帯で見られるものであり、この点、稲穂の国である日本も例外ではない。じっさい江戸時代までは、あちこちの村落で、よく行われていたことなのである――

ということとはである。たとえば私が住んでいる場所の近くで「性的オルギア」が行われていたとしても何の不思議もないはずだ。

そして「事実そうであったらしいこと」を証明するような文章に出会ったので、ここに紹介しておくことにする。

私が住んでいる茨城県には「筑波山」という山があるのだが、ここで紹介する文章は、その筑波山における「性的オルギア」について述べたものである。なお茨城県は、昔は常陸国と呼ばれていた。

この常陸国を代表する名山が筑波山である。この山は実は標高876メートルしかなく、富士山（3776メートル）に比べればはるかに低いのだが、あたりが平野で他に高い山がないこともあってか、古くから親しまれた。

そういえば男体山（西峰）と女体山（東峰）と二つのピークがあることも、富士山とは対象的だ。（中略）

確かに、この地は男女川という川もあり、筑波山神社に男女一对の神が祀られていることもあり、古くから生を謳歌する山である。

筑波山の耀歌といえ、一般にいう歌垣であった。歌垣とは、未婚の男女が集まり、歌を詠み情を交わすもので、フリーセックスのパーティーでもある。

なぜそんなことをするかといえば、大地の実りを豊かにするため、人間も「生産」に励むのである。こういう「意識」を残した農業祭は今でも全国各地にみられる。

井沢元彦『逆説の日本史・別巻2』より

エロスを象徴する山

筑波山は、唯一、私が登ったことがある、山らしい山でもある。チャレンジするのに登山道具などはないが、登ればそれなりに体力は消耗する。山道入り口から登頂するまでに二時間ほどかかったと思う。

私が登ったのは二十代の後半であり、現在の妻と、結婚する少し前に登ったものだった。今思うと、何とも健康的なデートをしたものである。

ところで私は、自分のことを「アモルの人」だと思っている。そして、このアモル（ポルトガル語で愛）には、主に二つの種類があるように思われる。

その一つが、無差別の愛たる「アガペー」であり、もう一つが男女の愛にも通じる「エロス」である。もう少し詳しく言うと、アガペーは「自分を愛するように隣人を愛しなさい」というイエスの言葉に集約されるような「他者のなかに、自分との同一性を見出そうとする愛」である。

それに対して、エロスの根源にあるのは「別種のもの同士の間」あるいは「対立物の結合」ということになるだろう。

してみると、私の神学を形成しているのは「存在と虚無の結合（ヘルベド）」であり、しかも私は、それを恋愛感情のなかに見出したのだった。それについて描いているのが、第四福音書の第二部「太陽を着た女」に他ならない。

したがって、私が自身を「アモルの人」と認識するとき、その愛は、疑いようもなくエロスのものである。そしてまた、性的オルギア（歌垣）で謳歌される愛がエロスであったことも、疑いようもない事実である。

それを思いつつ、家の近くの道路から筑波山の山稜を眺めると、実に感慨深いものがある。自然と心のなかに「象徴性の神秘」という言葉が浮かんでくるからだ。私は生まれるべき場所に生まれたのかもしれない、と。

晴れた日には、男体山も女体山も、その頂上がハッキリと見える。まさにエロスの山の雄姿である。

（４）粘膜と割礼

内蔵の共有

私は『ディオニュソスの深層・闇の神性篇』で次のようなことを述べた。もっとも、根本の出典は第五福音書ではある。少し長くなるが引用したい。

「性的オルギアが属する」座標Ⅰで人々を結び付けるのは、今や精神に取って代わることで主役となった、彼らの「物質的肉体」である。

つまり複数の「快感で心が吹き飛んでしまった、物質としての肉体」が、人々を一つにする訳だ。

これを即物的に言い表せば「セックスとその絶頂が、人々を結びつける」ということになる。

それは当然、さほど長い時間ではあり得ない。けれども、その短い時間の中で、確かにセックスとその絶頂が「分かちがたく、彼らを一つにする」のである。

もしかしたらそれは、卑俗で安っぽい話に聞こえるかもしれない。

だが実際問題として、皮膚と皮膚が「日常的な自他を分かつ境界線」だとしたら、である。

互いの性器という、皮膚になりきらない粘膜同士が触れ合っている「性交の状態」は、物質的な観点からすれば、より「自他一体」の概念に近くはないだろうか。

それというのも、これはほとんど「互いの内臓を共有している」ような状態だからだ。

ご存じのとおり、人の内臓は粘膜で覆われている。そして普段は「自分以外の誰のものでもないもの」として、それらは体の内側に、固く閉じ込められている。

しかし、今はその内臓に近いものが、他人と触れ合っているのだ。とくに女性の膣内など、内臓そのものではないか。

そんな表面に触れ合っている者同士が「明確に数えられる二人の人間である」とは、誰であっても、なかなか言いづらいのではなからうか。

そういえば、混在的一者の表れである「妊婦」もまた、考えてみれば「内臓的な自他一体」に他ならなかった。母親の子宮に包まれた胎児は、ほとんど母親の内臓のようなものだからだ。

まさにそうした形式において、妊婦は「母親と子供との自他一体状態」を成立させているのである。だとすればだ。「性的オルギアにあって乱交している人々」もまた、自他一体の度合いとしては、ほとんど「妊婦」と等しいレベルに達しているのではないだろうか。

つまり私には、内臓の共有によって、彼らが「妊婦における母子と同じ程度の、肉体的一者性」を表現しているように見えるのである――

男性性器の内臓レベル

しかし後になってふと思ったのである。

すでに右の文中でも「とくに女性の膣内など、内臓そのものではないか」と、「とくに」という文言を使っている。つまりその言葉によって「男性性器はそれ程でもないけれども」ということを暗示しているわけだ。

そうであれば、男性の性器に関しては、その「内臓的であること」に、かなりの制限がつきまとうということになる。そうすると、右の文章が持っていたはずの「内臓的一体性の真実性の価値」が、幾分かダウンしてしまうことにもなる。

この困った問題を克服するため、まずはある程度こまかく、男性性器についての考察を行ってみたい。そうしてみると、男性の性器は、彼が生まれたときには、必ず亀頭の周囲に包皮を伴っている。そして、そのままの状態で少年期を過ごし、第二次成長期が訪れると、この包皮が自然と剥けて、中にあった亀頭が常時露出するようになる。

私は子供のときに「どうして、こんな皮が亀頭（陰茎の先端）を包んでいるのだろう」と考えてみたことがある。

もちろん当時の私に答えは出せなかったのだが、今思えば、その答えは「内臓としての性器」を保存するためということになりそうである。つまり、人間の肉体のつくり自体が、座標1の「内臓的自他一体」を要求しているのである。

そういえば昔「とんねるずのみなさんのおかげです」のコントで、貴さんが憲さんに「ちんちんの先の粘膜が、まだ皮膚化してないんだろう」と言っていた。そう、たしかに包皮に包まれている限りは、亀頭は粘膜状の「内臓性」を残していられるのである。

ということは、もしも厳密に座標1の「内臓的一体性」を体現するならば、その時男性は、包茎の状態でなければならぬことになる。セックスのさいには亀頭を露出させるにしても、普段は包皮の保護によって、その粘膜と内臓性を守らなければならない。

ユダヤ人の割礼

ところが、このようなスタイルを完全に拒否した人々もいる。それがユダヤ民族である。彼らは、乳児のころに陰茎の包皮を切ってしまい、それにより亀頭部分を露出させることで、いち早く粘膜を皮膚化させてしまうのである。

これは生後8日目に行われる儀式で、一般に「割礼」と呼ばれている。生後8日とは、ちょっと気が早い気がするが、大人になってから割礼を行うと、激しい痛みのために一週間は動けなくなるそう。そのため、まだしも痛覚が鈍い、乳児のときにこの儀式を済ませてしまうのである。

この割礼は、ユダヤ民族の父祖アブラハムから始まっている由緒正しい伝統儀式だ。割礼によって人は、神と「アブラハム契約」を交わしたことになる。

アブラハム契約とは、ヤハウェという神に忠誠を誓うことで、アブラハムの子孫が、星の数ほどにも増えていくという契約内容のことをいう。

ところで、アブラハムの子孫であるユダヤ民族には、つねに敵がいた。それが「アシュタロテ・バー」に代表されるカナン人の宗教だ。これはまさしく「大地母神と配偶神の宗教」であり、要するに「性的オルギアを伴う、座標1的な宗教」だった。

かかる性的オルギアを伴う宗教には、当然のこととして「内臓的一体性」が恵まれる。そして右で見たように、その内臓的一体性が純粋なものとなるためには、男性に「包皮により保護された粘膜状の亀頭」が必要だった。

そして、そうだとしたらである。

「アシュタロテ・バー」を敵とし、これと決別することを目標としたユダヤ民族が、割礼によって、早々に「亀頭の粘膜の皮膚化」を成立させようとしたことは、宗教的に見て、まことに納得がいく対抗手段ということになるだろう。

ユダヤ民族の弁別性

だいたい、ユダヤ教が求めてやまないのは、座標5的な「自他二元」の精神状態なのである。

同一化や手段化を排することによって実現される、自己と他者の完全な分離。そうして分離したものの、契約によるつながりこそが、ユダヤ教の目的とする社会性であり、宗教性なのである。

よって、ここで強調されるのは「一体化」よりも、はるかに「弁別性」である。

それは同時に「粘膜同士の一体性」よりは「皮膚同士の境界保持」に愛着を持つであろう宗教性でもある。

そうだとしたら「包皮によって性器の粘膜を守る」などということは、彼らにとって、まさに「馬鹿げている」もいいところの愚行ということになるだろう。

割礼を奨励はしない

そして、ヘルメスの杖的に言って、座標1よりも、座標5のほうが価値が高いのは間違いない。だから、ユダヤ民族が、たとえば預言者エリヤに導かれて、バール神の信者たちを殺戮したのも、単なる惨殺という言葉では抱えきれない「正義」を含んでいることなのだろうと推測する。

しかしだ。第二、第三福音書で示したように、究極的には、私たちが目指すべき宗教性とは「すべての座標を経験して、神の似姿となること」なのである。

そういう意味では、座標5が大事なら、それと同じぐらいに座標1も大事なのだ。

そして、それが真実なのだとしたら「一つの座標に留まって、自分たちより下位座標にある者たちを侮蔑、排除する」というユダヤ教のスタイルは、究極の意味における正義にはなり得ないだろう。

あまつさえユダヤ人の「他の座標への無理解」は、イエス・キリスト（座標9）の排除（殺害）にまで影響を与えている。彼らは狭量な「座標5」によって、自分たちよりも上位にある「座標9」まで裁いてしまったのだ。

それだから私は、一つの座標への偏執を象徴する「ユダヤ人の割礼」を礼賛などしないし、読者の皆さんに奨励したりもしない。むしろ私からは、

「勝手に剥けてしまうものは自然のことなのだから構わないが、わざわざ包皮を切除する必要まではない」というふうに言うておこう。

ディオニュソスの深層 二人の母篇

著 者 正道

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
